

令和2年度(2020年度)

1.17 防災未来賞

ぼうさい甲子園

記録誌

今こそ生きる
「ぼうさい」の学び

- 主 催● 兵庫県、(株)毎日新聞社、(公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構
(阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター)
- 後 援● 内閣府、総務省消防庁、文部科学省、国土交通省、兵庫県教育委員会、
神戸市、神戸市神戸市教育委員会、関西広域連合、
ひょうご安全の日推進県民会議
- 協 賛● 独立行政法人都市再生機構
- 事務局● 特定非営利活動法人さくらネット



兵庫県知事 井戸 敏三

震災を決して風化させてはならない。その強い想いから、震災の経験と教訓を継承しようと始まった1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」。16回目を迎えた今年度はコロナ禍にもかかわらず、昨年度を上回る全国144の学校・団体から応募があったことは嬉しい出来事でした。

生徒自らが企画・運営し、感染症対策にも配慮した総合防災訓練を実践した特別支援学校。気象台から専門家を招き、土砂災害の前兆を学びながら、オリジナルのハザードマップを作成した小学校。外国人観光客を対象とした防災アイデアや住民の避難意識を変える防災CMづくりに取り組んだ高等学校。熱意と創意工夫にあふれた素晴らしい取り組みが溢れています。

震災の経験と教訓を「伝え」、「活かし」、次なる災害に「備える」。若い皆さんが率先して防災減災活動を進め、その成果を内外に発信していくことで、日頃から防災について考え、行動する「災害文化」が定着していくことを願っています。皆さんの取り組みを大変たのしく感じるとともに、心からの拍手を贈ります。

いまなお猛威を振るう新型コロナウイルス。しかしコロナ禍だからといって、自然災害は待つはくれません。こんな時だからこそ、ポストコロナの明るい地域の姿を描きながら、安全安心な社会の実現に向けた歩みを、より一層力強く進めていかねばなりません。

今年は東日本大震災から10年の節目でもあります。あらためて、私たち一人ひとりが防災・減災についてしっかりと考え、議論し、行動していきましょう。

この記録誌には、そのためのヒントがたくさん詰まっています。皆さんがそれぞれの地域で工夫を凝らしながら、元気に取り組みを進められることを期待します。



毎日新聞社大阪本社編集局長 島田 智

昨年の表彰式で、私は「災害は常に我々の予測を超えてやってきます」と挨拶させていただきました。あれから1年。予測を超えるどころか、全く想像もしなかった新型コロナウイルスという「災害」に私たちは翻弄されています。経験したことのない状況の中、防災活動をどう継続していくのか、難しい課題だったと思います。しかし、今できることは何か、さらに一歩進み、今だからこそできることがあるのではないかと、今回の応募144校・団体の皆さんが、さまざまな挑戦を試みていることがよく分かりました。その柔軟な発想を、心強く思います。

中でも、グランプリを受賞した宮城県立支援学校女川高等学園の活動には、さまざまな工夫が詰まっていました。大人が提案して終わりではなく、生徒自身が主体的に計画立案し、実行していく。そうすることで、防災への意識が血肉となっていく。生徒主導、と言うは易く、行方は難しいでしょう。支援学校に固有の課題もあったでしょう。しかし、コロナ禍であっても、いや、そうであるからこそ知恵を絞り、上滑りの活動ではなく、実体験を重視する姿勢に頭が下がります。また、地域との絆を絶やさなかったことも印象的でした。「他者と協力しあった経験は、いざという時に彼らの記憶から蘇り、生き抜く選択肢を増やし、行動する力に進化していくものと思っている」。応募書類に書かれたこの一節に、深く共感します。

「リモート」の大きな可能性に気づいたのも昨年の特徴です。遠隔地の学校との交流、専門家との意見交換。ハードルが一気に下がりました。知見を広め、自らの活動を振り返るために、積極的に使いこなしている学校が多いのに驚きました。今後も、有効なツールとして生き残っていくでしょう。

昨年は阪神大震災25年。今年は東日本大震災10年。記憶と教訓を受け継ぎ、後世に伝えねばなりません。そして、コロナ禍をどう乗り越えたのか。今、経験している私たちが記録に残し語り継がねばなりません。今年も予断を許さない状況が続くと思われます。安全第一で、今できることは何か、皆さんの一段の創意工夫に期待します。

今年度は、防災教育の力と知恵の広がりを応援するとともに、新型コロナウイルス感染症を乗り越えていく取り組みを紹介するため、特設サイトを開設しています。

受賞校の紹介動画や取り組み状況など、本紙では伝えきれない内容を掲載しています。是非ご覧ください。

<http://bousai-koushien.net/>





公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構副理事長
(阪神・淡路大震災記念 人と防災未来センター長)

河田 恵昭

令和2年度1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」を開催したところ、全国からたくさんの方にご応募いただきまして、ありがとうございます。

昨年から感染が拡大している新型コロナウイルス感染症は、今年になっても感染拡大が衰えることなく、世界中で猛威を振っています。昨年の春は、多くの学校で休校になり、学習計画の変更や感染症への対応など先生も児童・生徒の皆さんも大変ご苦労されたのではないかと思います。

しかし、この感染症拡大の状況は、学校再開できない、学校施設が使えないなど自然災害が起こったときの状況に似ています。つまり、これまで防災教育、防災活動に取り組まれていた学校では、その経験がこの感染症拡大の時期に活かされているのではないかと考えました。そこで、その各学校での工夫を皆さんで共有していこうと今年度は、特別企画として、「健康と生活を守るための新型コロナウイルス感染症に関する取り組み」を対象活動に加えて、少し時期は遅れましたが、第16回として「ぼうさい甲子園」を引き続き開催させていただく運びになりました。

学校でのご苦労を考慮して、負担を減らすべく申込フォームを少し簡単にしてみました。それでも昨年と同じぐらい応募があるだろうかと心配していましたが、今年度のぼうさい甲子園は、北海道から沖縄県までの33都道府県から、昨年を大幅に超える144校・団体の応募がありました。このことは、この感染症拡大という困難な時期にあっても、全国的に防災教育・防災活動に取り組まれている学校があるということで、その重要性の全国的な広がりを感じるところですが、その一方で、フォームの簡略化が応募のハードルを下げ、初応募が半数を超える75件に及んだということも今後のこの事業に継続に当たり考えさせられたところです。

最後になりますが、新型コロナウイルス感染症の感染拡大が収まらない中、幸い大きな災害が起こらなかったものの、災害は待つてはくれません。時代に合わせた災害対応が必要になってきています。今年度の各学校の応募活動での工夫を共有することで、これからは新たな時代の防災教育・防災活動に取り組んでいただき、次回、この「ぼうさい甲子園」を開催したときには、今年度は残念ながら開けなかった表彰式・発表会をこの神戸の地で開催し、皆さんのお顔を見られることを願い、私の挨拶とさせていただきます。

講 評

第16回となる令和2年度の1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」ですが、このコロナ禍での状況にかかわらず、子どもたちや学生たちによる防災教育や防災活動が着実に取り組まれていることを喜ばしく思います。

審査にあたりましては、「地域性」や「独創性」、「自主性」、「継続性」といった4つの観点を選考基準に、選考委員会で審査し、決定しました。応募があった防災教育や防災活動の取組、あるいは、今年度加えた新型コロナウイルス感染症対策に関わる工夫は、どれも素晴らしいものばかりでしたが、これらの中で特に優れた59団体を表彰することとなりました。

「グランプリ」には、「特別支援学校・団体の部」の「宮城県立特別支援学校女川高等学園」が選ばれました。この学校は、コロナ禍でも感染症対策に工夫をしながら、生徒自らが企画運営する総合防災訓練を実施されるなど、全ての審査員から高い評価を受け、見事グランプリに輝きました。平成28年から毎年応募されるなど、着実に活動を実施され、「特別支援学校・団体の部」が昨年、設立されると同時に「奨励賞」を受賞され、そして今年度、部門の大賞とともにグランプリと大きくステップアップされました。おめでとうございます。

ぼうさい大賞「小学生の部」は、広島県「坂町立(さかちょうりつ)小屋浦(こやうら)小学校」です。この地域は平成30年の西日本豪雨で甚大な被害を受け、児童達も避難生活など大変苦労されたとのことでしたが、それから2年たった今年度、児童の自主性のもと「キッズ防災士」をめざすという目標を掲げ、土砂災害の前兆を再現する「避難スイッチ」探しなどの防災に関わる総合学習に取り組まれ、初めての応募でぼうさい大賞に選ばれました。

ぼうさい大賞「中学生の部」は、和歌山県「印南(いなみ)町立印南中学校」です。この中学校は、今年度は「避難所生活」をテーマに防災に関わる総合学習を実施し、コロナ禍においても防災キャンプを実施されるなどの取組が評価され、ぼうさい大賞に選ばれました。平成22年度の初応募で奨励賞に選ばれ、その後も今年度まで毎年応募され、そのほとんどの年度で受賞するなど素晴らしい取組を続けられ、遂に今年度、ぼうさい大賞へのステップアップをされました。

ぼうさい大賞「高校生の部」は、東京都の「目黒星美(めぐろせいび)学園中学高等学校」です。中高一貫の強みを活かし、総合的に防災教育・防災活動に取り組まれ、有志による地域防災イベントへの参加や新型コロナウイルス感染症に関わる生徒主体のプロジェクトに取り組まれるなど、生徒の自主性が大いに感じられ、3年ぶり2回目の応募で見事「ぼうさい大賞」受賞となりました。

ぼうさい大賞「大学生の部」は、「静岡大学教育学部 藤井基貴(ふじいもとき)研究室」です。教育学部の特性も活かし、静岡県内外の様々な学校と連携して、感染症と防災を融合した新たな教材の開発や肢体不自由な児童生徒らに向けた防災授業の開発などの防災教育に取り組み、3年ぶりの「ぼうさい大賞」受賞となりました。

優秀賞や奨励賞の受賞校につきましては、このコロナ禍における工夫、地域との連携、あるいはマンネリ化を防ぎつつ継続した活動などが高く評価されています。

「URレジリエンス賞」では、防災マップの作成やコロナ禍で「3密」を避けるように計画した避難訓練の実施など、縮災・減災につながる活動を高く評価されています。

被災の経験と教訓をもとに生まれた活動に対してエールを贈る「はばタン賞」については、災害を受けた地域の経験を活かした活動に取り組んでいる学校等に授与しました。

このほか、安全・安心なまちづくりを目指す取組を対象とした「だいじょうぶ賞」や、先導的な取組や初応募の優れた取組を対象とした「フロンティア賞」、過去数年にわたり継続的に優れた防災活動を対象とする「継続こそ力賞」、そして、新型コロナウイルス感染症対策や防災活動の中での感染症対策などの積極的な取組を対象とした「しなやかwithコロナ賞」と、多様な観点から特別賞を授与しました。

このたび、優れた防災教育・防災活動を行われた受賞者の皆様をご紹介させていただきましたが、これらの学校や団体の取組を参考にしながら、今後とも、安全で安心な社会づくりに向けた更なる取組を継続されることを、主催者として期待しております。

令和2年度 1.17 防災未来賞「ぼうさい甲子園」

受賞校・団体のご紹介

今年度は、59校・団体が受賞いたしました。
来年度も、更にレベルアップした取り組みのご応募、お待ちしております。



令和2年度 1.17 防災未来賞「ぼうさい甲子園」 特別賞

●URレジリエンス賞とは？

被害を減らすと同時に、復旧までの時間を短くすることにより、社会に及ぼす影響を減らす「レジリエンス(縮災)」という考え方に繋がる取り組みに贈られます

●はばタン賞とは？

阪神・淡路大震災以降に被災した地域にエールを送るため、これら地域を対象に被災の経験と教訓から生まれた優れた活動に贈られます

●だいじょうぶ賞とは？

安心・安全なまちづくりを目指す「だいじょうぶ」キャンペーン実行委員会にちなんだ賞
 防犯や街の身近な安全、安心・安全なまちづくりを目指す優れた活動に贈られます

今年度「テーマ賞」

●しなやかwithコロナ賞とは？

新型コロナ感染症対策や、防災活動の中での感染症対策など、迅速性や柔軟性のある取組みに贈られる賞です

●フロンティア賞とは？

防災教育活動の広がりを促進するための賞
 過去に受賞がなかった地域・分野での先導的な取組または初応募の優れた取り組みに贈られる賞です

●継続こそ力賞とは？

過去数年に渡り継続的に実施された優れた取り組みに贈られる賞です



令和2年度 1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」

グランプリ

宮城県

宮城県立支援学校 女川高等学園

生徒自らが企画・運営する総合防災訓練の実施、教訓を地域住民と共有するための「防災パンフレット」作成、配布

【活動の成果、手応え】

本校における「総合防災訓練」は、寄宿舎を中心とした日々の集団生活の中で、防災の責務を担い役割を果たし、それぞれの係の立場・目線から災害について学びを深め、学んだ内容を体験という形で他者に提供する取組になっている。

指導者からの一方的な情報提供ではなく、生徒個々が責任感の中で学びを深め、他者のために訓練をコーディネートしていく体験であり、誰かの経験と自分の経験を合わせたときに、災害を乗り越えるための「協力」という、より大きな力に変えることを体験することにほかならない。この訓練を単にみんなと一緒に楽しむ学校行事として捉えている生徒もいるかもしれない。それでも、楽しさの中で、防災や感染症対策について真剣に考え、指先で触れ、足で重さを感じ、舌で味わった感覚、他者と協力し合った経験は、いざという時に彼らの記憶から蘇り、生き抜く選択肢を増やし、行動する力に進化していくものと思っている。

新型コロナウイルス感染症を警戒することで、これまでの計画を大きく見直すことが求められた。しかし、生徒個々が当事者意識と責任感を持って訓練に携わることで、自分たちの暮らしを客観視し、日々の集団生活のリスクに目を向ける姿があったことは、計画立案時には思いもなかった姿であった。新しい時代の感染を警戒する中で、「〇〇をさせなければならない」という我々指導者の焦りは、「〇〇について、彼ら（生徒）ならどう考える？」といった気持ちの変化とゆとりにつながり、その自覚を持つ職員が増えている。



令和2年度 1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」

小学生部門 ぼうさい大賞

広島県

坂町立小屋浦小学校 4年生

豪雨災害時の気象状況や土砂災害の前兆を専門家から学習、土砂の匂いや山鳴りを再現する「避難スイッチ」探し

【活動の成果、手応え】

〔学習を通して変わったと思うこと〕

- 僕は、防災についてわかってきて、家で防災について話をする機会が増えた。
- 避難するタイミングを親任せにしていたけど、避難レベルを習ったので、自分でお父さんお母さんに避難しようと言うようになりました。
- 台風が来た時に、今まではお父さんお母さんだけが台風の話をしていただけたけど、ぼくも一緒に話ができるようになった。
- 土砂災害の前兆を意識したり、避難グッズの準備を手伝ったりするようになった。
- 西日本豪雨前は、「災害なんて」と油断していて避難が遅れて大変なことになったけど、学習して早く避難しようって気持ちをもつようになった。
- 土砂災害について家族で話す機会が増えた。
- 毎日気象情報を見るようになったし、警報が出たら家族で早く避難するようになった。
- 防災について、わからないことは調べるようになった。

令和元年西日本台風により、大きな被害が発生した広島県坂町小屋浦小学校



令和2年度 1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」 中学生部門 ぼうさい大賞

和歌山県

印南町立印南中学校

「避難所生活」がテーマの防災学習、一人用テントで校庭・体育館に一泊する夜間避難体験、避難時要支援者体験の実施等

【活動の成果、手応え】

現在の防災教育は総合的な学習の時間をメインに使って、最上級生の3年生ならではのと言える自由研究の延長線上にある学習を実施している。2015年度から津波防災という大きなテーマに一本化し、その中でサブテーマを決めて学習を進めている。今年度は避難所が大きなテーマだが、生徒たちは自分たちからも新たなテーマを提案している。4年前にプチ避難所体験と言うテーマでとり組んだが、災害時をよりリアルに想像できることや生徒の自主性を促進する効果があることが認められたので、今回は宿泊を伴う体験とした。避難所生活がより切実に感じられたようだった。それゆえ今回の試みは、防災意識の向上に繋がったと確信している。

学校運営は新型コロナウイルス感染症対策を徹底しており、避難訓練についてもシェイクアウトに留めるなど対応してきた。今回の避難所訓練では、避難所生活やコロナ対策も自分たちで計画し運営、比較的スムーズに役割分担してとり組んでいた。こちらが期待していた以上に「協力」の重要性に気がついた生徒が多かった。ただ、初めての経験なのでどこか不安な場面が見られたし、キャンプ初体験者が多く、初日はやや興奮気味の生徒も多く上滑り感があった。ともかく、災害時要支援者体験、夜間避難訓練、避難所生活と一連の体験は生徒に災害時の状況のある程度リアルに感じさせることができた、と手応えを感じている。



令和2年度 1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」 高校生部門 ぼうさい大賞

東京都

目黒星美学園中学高等学校

防災科学技術研究所の研究者等とのディスカッション、地域防災訓練・イベント参加（「ペットと防災」クイズや防災CMづくり）

【活動の成果、手応え】

今回のプロジェクトは、ゼロの状態から起ち上げて、何をどこにどのくらい寄付をするのかを決めることから、全て自分たちで行いました。登校することができないため、オンライン上でしか話しかることができなかつたり、計画していた予定がずれ込んでしまったりと大変なことも沢山ありましたが、「今の自分たちができることをしよう」という思いを形にして届けることができたのは、自分たちにとっての自信にもなり、非常に良い経験となりました。寄付品のマスクとアルコールジェルは、野外活動先の宿泊施設では、実際に使ってください、世田谷区では区長が直接受け取って、世田谷区の保育施設全47カ所に届けられました。修学旅行でお世話になっていた熊本の災害ボランティアガイドの団体にお送りした際は地元新聞でも取り上げていただきました。今回寄付をした方々から「新型コロナウイルス関連の対応に追われ、明るい話がない中で、このようなお話をいただけたことは本当にありがたいことです。」「マスク一枚一枚に添えられた温かいメッセージが励みになりました。」といった感謝の言葉をいただきました。現在学校のもとには、寄付品を実際に使っている写真や、感謝のメッセージが沢山寄せられています。困っている人、苦しい状況にある人の太陽のような存在になりたい、そんな思いを込めて名付けたこの「SOLプロジェクト」。寄付をした方々からこのような言葉をいただき、私たちの思いが届いたようで本当に嬉しく思いました。又、このような状況下で私たちが活動できる範囲が制限されている中、自分たちができることは何かを考え、ゼロからこのプロジェクトを起ち上げて、思いを形にして届けられたことは生徒一人一人の意識の向上にもつながりました。今回のプロジェクトを通して「課題を発見し行動すること」の大切さを伝えることができたのではないかと思います。現在は校内に、集まった寄付の合計金額のポスターや、寄付した方々から頂いた感謝状や写真の掲示を行っています。ボランティアの魅力をこの掲示によって、より生徒一人一人に伝えることができているのではないかと思います。



令和2年度 1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」
大学生部門 ぼうさい大賞

静岡県

静岡大学教育学部 藤井基貴研究室

防災教育プログラムの開発と実践（ゲームや紙芝居を用いた小中学校防災体験学習）、過去災害をテーマにした出前授業実施等

【活動の成果、手応え ＊5つの取り組みの中から2つについて抜粋】

- ①感染症と防災を融合した新たな教材の開発
- ②肢体不自由な児童生徒らに向けた防災授業の開発
- ③ハイブリットラーニングの確立

対面での打ち合わせや授業実践が制限されたため、結果的に研究室の活動はオンラインでのやり取りがほとんどとなった。

ZoomやSlackを活用して、打ち合わせや研究会だけでなく、授業までも手掛けてきた。今年4月以降に実践したオンライン授業は合計8回となり、研究会や交流会を含めると合計15回以上となる（2020年11月10日時点）。これまでは、アクティブ・ラーニングの実現という視点で授業開発に携わることが多かった学生も、このパンデミックをきっかけに、児童生徒の能動的な学習とハイブリットラーニングの両立を目指した授業開発に変化した側面がある。教育実習を経験した学生にとっても、オンライン授業のノウハウの獲得やその可能性に気付かされた。

- ④高校生による防災授業の社会実装に向けた試み

この活動は、高校生の保育実習体験を活用して、県内約40か所の保育園・幼稚園にて高校生が開発した幼児向け防災講座を実施してもらった。昨年度より始まったこの取組は、防災文化の継承や普及という点では評価できるが、「発達段階に合わせたアプローチ」や「的確なフィードバックの実現」にはまだ課題があった。それらの課題を解決するために、新設した研究室の公式LINEを通して、大学生と高校生がやり取りするプラットフォームを創造した。このプラットフォームは、高校生が適宜動画やワークシートをアップロードし、それを大学生が確認してより良いパッケージ開発のためのフィードバックを返す空間になっている。この結果、発達段階に合わせた独創的な防災遊びがたくさん誕生した。また、人数不足や遠方のため困難であったきめ細やかな支援やフィードバックを実現することができた。

- ⑤海外の防災関係者や青少年にむけた防災授業

4回目の大賞受賞となる
静岡大学教育学部 藤井基貴研究室



令和2年度 1.17防災未来賞「ぼうさい甲子園」

優 秀 賞

愛知県

西尾市立白浜小学校

近隣学校等と連携した避難訓練や無告知避難訓練、高学年から低学年・低学年から幼稚園児へ防災授業実施

【活動の成果、手応え】

今後、昨年度実施できなかった後期防災集会を開催し、学習の成果の発表を行う。ここでは6年生から、在校生に向けて次年度の防災活動のバトンを渡す集会ともなる。また、6年生は、古くなった展示物を改めたり、防災について学びやすくしたりして、防災ルームの整備を進めている。避難訓練としては、2月に無告知無指示避難訓練を計画している。コロナ禍での取り組みが続いたが、子どもたちの活動のまとめとして、その成果を検証したいと考えている。

平成23年度からスタートした防災教育も本年度は10年目を迎えた。継続は力なりで、子どもも保護者も防災に対しては高い関心と実践力を身に着けてきていると感じる。しかし、この活動を継続するうえで支えてくださっている地域の方の高齢化、活動の慣れと油断、施設設備の老朽化、防災意識や実践力をさらに高めるための工夫、コロナ禍において避難先での密集を避けなければいけない生活など、思い浮かぶ課題は山とある。本校の防災教育を継続させるためには、何が大切なのか、毎年人事で人の入れ変わる学校で何が続けられるのか、本校の防災教育も転機の時期かとも感じる。今後、この意義ある白浜小学校の防災学習や活動を次の世代の子どもと教職員がつないでいくためには、考えなければいけないことが多くあるが、基本は「できることをほんの少し工夫した継続」であると担当者は考える。華々しい実践の時期は過ぎたのかとも感じる。活動を精査し、再び子どもたちに根付く活動に育てていきたい。



優 秀 賞

徳島県

徳島市津田中学校 防災学習倶楽部

事前復興まちづくりをテーマにしたジオラマ・住宅模型制作、感染症による防災意識変化のアンケート調査とミニコミ誌発行

【活動の成果、手応え】

防災学習16年目を受けて、本年度も継続と啓発をテーマに学習を行った。そんな中、新型コロナウイルス感染症による臨時休業を受けて、昨年度のまとめと本年度のスタートが十分にできなかった。しかし、生徒たちは津田の地域を知り、弱みも強みも理解した上で学習に地域の課題について積極的に取り組むことができています。先輩方の残した成果を引き続き、自分たちもできるという信念のもと、学習に取り組んでいる。

昨年度、事前復興まちづくりのジオラマを作成、予定していた発表会が臨時休校により中止となった。休校に入ると、すぐ防災学習倶楽部の2、3年生がオンラインで活動したいと学校に連絡してきた。まず、災害時の非常持ち出し品の一覧表も見直し、その後は、保育所と幼稚園への出前授業のシナリオの改良など学校再開をにらんでオンラインで会議を続けた。その後、ジオラマを紹介する映像制作に取り掛かった。

地域と共に防災学習を通して、自助・共助の学習を重ね、防災学習倶楽部は様々な取り組みにチャレンジし続けている。そして少しでも多くの方に活動と研究を知ってもらい、共に防災・減災の取り組みを新型コロナウイルス感染症禍の中でも可能な活動を継続していきたい。「近所の方々とのネットワーク作りの大切さと、中学生や高校生の温かい声かけの大切さ」を実行し、ふるさとを愛し、一人でも多くの命が助かるような活動と啓発をし続けていきたい。この生徒たちの思いこそが成果だと考えられる。



大阪府

大阪府立堺工科高校 定時制の課程

小学生啓発用のミニ電気自動車制作、バイオディーゼル発電機による各種機器の充電体験、夜間防災体験の実施

【活動の成果、手応え】

私たち定時制の生徒は、自分に自信がなく、世間からもあまり温かい目で見られていない。しかし、この活動に取り組んでからは、地域の方々が温かく見守ってくれ、自分に自信が持てるようになり、ボランティア精神が芽生え、自己有用感を持つことが出来た。そして私たちは、被災地を訪問し、地震・津波の被害状況を実際に見て、被災者の方々と交流し、自然災害について多くの事を学んだ。

また、私たちが製作した「バイオディーゼル発電機」や「電気自動車」は、地域の方に大好評で、昨年近隣地域を襲った台風の影響で数日間停電した際に大いに役立った。工事関係者が、「バイオディーゼル発電機」を使って停電の工事をしたくらいである。

加えて「夜間防災避難訓練」を実施したことにより、地域と私たちの関係は以前に増して良好になり、まさに、地域と家庭と学校が協力して、私たちを育ててくれている。

堺市と近隣地域の強い要望で、主催している「キャンドルナイト」も、小学生から大人まで大好評で、参加者に「電気」の大切さを理解してもらい、昨年の「ブラックアウト」の際は、地域と学校が協力して対応することが出来た。そして、「ぼうさい」について考え災害に備える大切さを再認識してもらえた。

何よりも、私たちと地域の方々に「自助」・「共助」の精神が培われた。



優 秀 賞

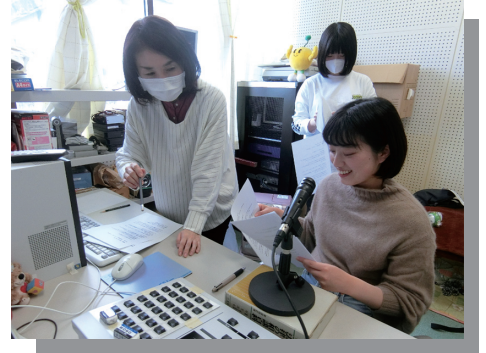
大阪府

関西大学社会安全学部 近藤誠司研究室

防災教育動画をオンライン収録とウェブ公開、コミュニティFMで防災番組放送、防災行政無線を活用した防災メモ情報発信

【活動の成果、手応え】

新しいメディアの活用によって活動の幅や興行きが広がったことの真価をあらためて考察するならば、大きく3つのシフトチェンジがあったと考えることができます。まず1つ目は、「つながりの価値の再発見」。なかなか交流ができないジレンマの中であって、ようやくリアルに「会えた」ときの喜びは、本当に大きなものでした。学生たちは、これまで当たり前「つながっていた」ことのすばらしさを再確認し、あらためて「つながれる」ことのすばらしさを知りました。ひるがえって、災害はこうした「つながりを奪う」ものです。だから、わたしたちは、「つながり」が断ち切られないように防災の取り組みを継続して実施しています。2つ目は、「新たなつながりの契機を生んだ」こと。コロナ禍では、「つながりたい」という思いが強まったがゆえに、たくさん「つながりましょう」というお声がけをいただきました。動画教材プラットフォームを視聴した尼崎市教育委員会からは未就学児用のビデオが欲しいと依頼があり、いまはコラボして配信しており、尼崎市YouTubeチャンネルとケーブルテレビ「ベイコミュニケーションズ」にて再配信しています。また、動画教材プラットフォームにアップした児童向けの「体操」ビデオを視聴した高槻市の特別養護老人ホームの施設長から、高齢者向けのストレッチのビデオが制作できないかなどの相談を受け、このことを契機として高槻市の高齢福祉施設事業者協議会防災対策部会とコラボして、100を超える福祉事業所と防災活動を共に進めていくことになりました。さいごに3つ目は、「意図せざるつながりがクロスする」ことの発展性を見出しています。これまでわたしたちは、プロジェクトベースで動いていたことから、フィールドごとにつながりがone to oneで閉じていたきらいがありました。ところが、動画教材プラットフォームによる情報発信をきっかけとして、A地域の人がB地域の取り組みを知って参考にすると、B地域の人がC地域の特性を知って連絡をとると、わたしたちのゼミをハブとしながらも、これまで直接的には出会っていなかった地域同士がつながる動きが加速しています。これは、望外の喜びです。コロナ禍にあって、アクロバティックに新たなことを成し遂げたというよりも、これまで見過ごしてきた価値やアプローチをしっかりと掌におさめる機会を得たと考えています。ですので、今年の変化は一過性のものではなく、将来の礎となるものとして位置付けられることでしょう。



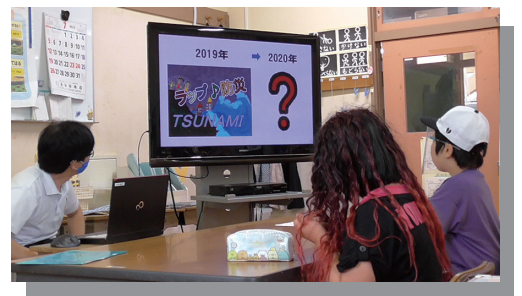
千葉県

千葉県立長生特別支援学校

防災リュックの制作、中身の準備と点検、防災の知識を歌にする「防災ラップ」の制作、継続した避難訓練の実施

【活動の成果、手応え】

- ・行事の積み重ねの成果で、児童生徒は落ち着いて見通しをもって行動できている。
- ・「ラップ」防災は、小学部の2人組中心の活動ではあるが、全校児童生徒の関心は高く、各学部、学級の防災教育授業の導入に活用されている。また、昼の校内放送で、防災関連の連絡に加えて音源を流して防災意識を高めるツールとしても役立っている。関係各位へは、「ラップ」防災YouTube動画のQRコードを印刷した名刺やパンフレットを交換したり配布したりして、地域防災連携のきっかけに活用している。
- ・各学部とも、防災教育を確実に教育課程に組み込み、実施できている。
- ・休校中は適宜の家庭訪問、電話連絡により家庭との連絡は密にしていたが、マスク不足の時期の手作りマスク配付はとても感謝され、御家庭とのきずなが深まった感じがした。
- ・新型コロナウイルス感染防止対策を通して、改めて学校における安全教育を見直すよい機会となった。また、行事計画見直しのよい機会にもなっている。
- ・ICT教育の推進が一気に進んでいる。
- ・休校中の家庭学習のための動画やテキスト教材の配信、学校からのメッセージ掲載を通して、ホームページの更新が、昨年度までに比べて格段に進んだ。
- ・実施計画作成の段階で、関係各位の防災意識の高まりを感じている。



チャレンジ賞

この困難な時期における防災教育や
新型コロナウイルス感染症対策などの取り組みに贈られる賞です。

北海道	江別市立野幌若葉小学校	兵庫県	特定非営利活動法人 アトリエ・Petata
北海道	南富良野町立南富良野中学校	兵庫県	神戸市立渚中学校
北海道	北海道根室高等学校	兵庫県	神戸市立鈴蘭台小学校
青森県	平川市立竹館小学校	兵庫県	神戸市立神港橋高等学校 DiReSt67
宮城県	仙台白百合学園高等学校	兵庫県	神戸市立成徳小学校
宮城県	石巻市立広淵小学校	兵庫県	神戸大学
宮城県	気仙沼市立階上中学校	兵庫県	兵庫県立東灘高等学校 防災ジュニアリーダーとボランティア同好会
茨城県	茨城県立神栖高等学校	兵庫県	西宮市立総合教育センター付属 西宮浜義務教育学校
栃木県	栃木県立真岡北陵高等学校	兵庫県	兵庫県立阪神昆陽特別支援学校
栃木県	栃木県立栃木農業高等学校 農業土木・環境デザイン科	兵庫県	兵庫県立豊岡総合高等学校 インターアクトクラブ
千葉県	千葉県立市原特別支援学校	兵庫県	姫路市立旭陽小学校
東京都	港区立お台場学園港陽中学校	兵庫県	東洋大学附属姫路中学校・高等学校
東京都	練馬区立開進第四中学校	兵庫県	神戸大学附属小学校
東京都	東京都調布市立神代中学校	兵庫県	beyond disaster
東京都	東京都調布市立第三小学校	兵庫県	兵庫県立松陽高等学校
東京都	西東京市立田無第一中学校	和歌山県	和歌山県立日高高等学校
東京都	東京都立南多摩中等教育学校 防災支援隊	島根県	島根県立平田高等学校 JRC部
東京都	東京都立八王子西特別支援学校	島根県	島根県立出雲高等学校
神奈川県	神奈川県川崎市立南生田中学校	岡山県	岡山市立上道中学校
神奈川県	横須賀市立浦賀中学校	広島県	福山市立鞆の浦学園
福井県	福井県立武生東高校	広島県	府中市立栗生小学校
山梨県	山梨県立吉田高等学校	広島県	広島県呉市立和庄中学校
静岡県	静岡県立東部特別支援学校 伊豆松崎分校	広島県	呉市立荘山田小学校
静岡県	静岡県立三島南高等学校	広島県	広島市立落合小学校
静岡県	島田市立島田第五小学校	徳島県	由岐小学校
愛知県	幸田町立幸田中学校	徳島県	こどもプロジェクト1・2・3
愛知県	名古屋市立工芸高等学校 防災チーム	香川県	坂出市立東部小学校
愛知県	キッズぼうさい	愛媛県	愛媛県立松山工業高等学校
愛知県	石浜中自主防災会	高知県	太平洋学園高等学校
愛知県	愛知県立海翔高等学校	高知県	明德義塾高等学校
愛知県	愛知県立一宮東特別支援学校	高知県	高知県黒潮町大方児童館
三重県	防災世界子ども会議四日市 はづっ子カウボーイ	高知県	高知県立大方高等学校
三重県	三重県鳥羽市立鳥羽小学校	福岡県	北九州市立南小倉中学校
滋賀県	滋賀県立八日市南高校 地域支援活動同好会	福岡県	新宮町立新宮東中学校
京都府	京都府立東稜高等学校	福岡県	福岡市立玄界中学校
京都府	伏見ジュニア消防団住吉班	福岡県	福岡市立今津小学校
大阪府	大阪市立白鷺中学校	佐賀県	佐賀県立佐賀商業高等学校
大阪府	大阪府立豊中支援学校	熊本県	熊本県山鹿市立鹿北中学校
大阪府	関西学院千里国際高等部	熊本県	熊本県立天草高等学校 二年AS 防災班
大阪府	西宮・尼崎の防災教育を考える会	熊本県	南阿蘇村立南阿蘇中学校
大阪府	大阪府立柏原東高等学校	大分県	大分県立日田林工高等学校
大阪府	堺市立金岡南中学校 理科部「防災研究班」	大分県	日田市立五馬中学校
大阪府	大阪府立高石高等学校		

令和2年度事業概要

1	応募開始 令和2年9月1日	選考委員	委員長 河田 恵昭 (公財)ひょうご震災記念21世紀研究機構 人と防災未来センター長
2	応募締切 令和2年11月13日	副委員長 島田 智 (株)毎日新聞社大阪本社編集局長	
3	選考委員会 令和2年12月14日	副委員長 早金 孝 兵庫県防災監	
4	記者発表 令和2年12月23日	委員 石井布紀子 特定非営利法人さくらネット 代表理事	
5	表彰式・発表会 中止	委員 石塚 哲朗 文部科学省総合教育政策局男女共同参画共生社会学習・安全課 課長	
		委員 田中 伸和 独立行政法人都市再生機構理事・西日本支社長	
		委員 中尾 晃史 内閣府政策統括官(防災担当)付 参事官(普及啓発・連携担当)	
		委員 納谷 淑恵 特定非営利活動法人グローバルプロジェクト推進機構理事	
		委員 平田 直 防災科学技術研究所 参与兼首都圏レジリエンス研究推進センター長 (東京大学地震研究所 教授、一般社団法人 防災教育普及協会 会長)	
		委員 梶田 順子 兵庫県立舞子高等学校環境防災科 科長	